

令和 6 年 6 月 18 日現在

機関番号：11501

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K13840

研究課題名（和文）他校の授業研究会に参加した教師の「触発」の経験と実践の再構築過程の検証

研究課題名（英文）Examining the "inspiration" experiences of teachers who participated in lesson study groups at other schools and the process of restructuring their practices.

研究代表者

森田 智幸（Morita, Tomoyuki）

山形大学・大学院教育実践研究科・准教授

研究者番号：70634236

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の成果は以下の3点にある。
第1に、オンラインによる研究会を組織し、教師同士学び合う場を構築したことにある。学校外の教師とのつながりが、自身の教室実践の再構築をエンパワーすることが見えてきた。第2に、対面での授業研究会を開催することは、教師の自律性、校長の自律性のエンパワーにつながっていた。外部の助言者、指導主事、他校からの参加者があったことが、可能性を探り合い、自ら挑戦する機会を創り出した。第3に、新人期の省察経験を描き出すことができた。新人は「規範」にしばられ、実践の自由度を狭めていく。結果として子どもの事実を見て自身の実践をつくるという省察様式から疎外されている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的位置の一つは、他校の教師とのつながりが、教室における教育実践の革新をエンパワーする可能性を示すことができたことにある。新型コロナ禍は、教師や校長の行為を不確実性の中で制限した。しかし、教育実践はそもそも根源的に不確実性をその特徴としている。不確実性と対峙するうえで、他校の教師とのオンラインでのつながり、また、対面での授業研究会での探り合いが重要であることを本研究は明らかにした。本研究は、今後の教育実践において、校内はもちろん、校外においても、互いにエンパワーするネットワークを構築することの重要性を示唆している。

研究成果の概要（英文）：The outcomes of this study are as follows: Firstly, by organizing online research meetings, a platform for teachers to learn from each other was established. It became evident that connections with teachers outside of the school empower the reconstruction of one's classroom practices. Secondly, holding face-to-face teaching research meetings led to the empowerment of teachers' and principals' autonomy. The presence of external advisors, supervising officers, and participants from other schools created opportunities to explore possibilities and challenge oneself. Thirdly, the study was able to depict the reflective experiences during the novice period. Novices are constrained by "norms," which narrow the freedom of practice. Consequently, they are marginalized from the reflective style of creating their practice by observing the facts of children.

研究分野：教育学

キーワード：教師の学び 新人教師 授業研究会 学びの共同体 ネットワーク

1. 研究開始当初の背景

<改革の持続可能性という主題>

学校改革研究において、その持続可能性が中心主題となっている。エルモア(2006)は、アメリカの教育改革の歴史的な検討の中で、多くの改革がその普及と持続において困難を抱えていたことを指摘している。改革の持続の問題はアメリカだけにとどまらない。Saito et al. (2012)によると、ベトナムにおける、学習者中心の授業への転換と、教師の学びを重視した事後研究会の実施を中心とした学校改革の複数事例を検討した結果、多くの事例がプロジェクトの終了以後、学校改革を継続することはなかった。日本においても、「打ち上げ花火」型の授業研究などと揶揄されるように、改革の持続可能性において問題が生じている。

<校内授業研究会における問題探究的な対話の重要性と限界>

D.シヨーンによる「反省的实践家」という新しい専門職像の提起以後、学校改革の持続には、学校における対話の質を、「どのようにすればうまくできるか」を追究する効率的な問題解決の場から、「そもそも何が問題であるか」を発見する問題探究の場へと転換することが重要であることが共有されてきた(石井 2013 など)。校内授業研究会の談話分析研究では以下のことが明らかにされてきた。問題解決的な場では熟達者優位となり、特に初任者が主体的に参加できない。一方で、問題探究的な場では、初任者をはじめとして必ずしも解決を遂行することができない教師も参加することが可能になる(北田 2008、坂本 2011 など)。研究代表者は、山形県最上地区のある中学校の8年間の学校改革を対象として、生徒への対応に関する教師の「悩み」の変容に焦点を当てて分析した(森田 2018)。その結果、8年間、同僚と共に問題探究的な場に参加したことにより当初は抵抗感があった学校改革の意味を実感できていたこと、さらには、問題を共有できることが自身の教室実践を変えようとする原動力となっていたことが明らかになった。同僚と共に問題を探究し、共有することが改革の持続を可能にしていた。

一方、「悩み」は消えることなく語られ続け、問題探究を中心とした校内授業研究会での同僚間の対話だけでは問題の共有にとどまってしまう、自身の教室実践が変わったという実感を得るところまでは至っていないことも明らかになった(森田 2018)。

<外部からの「触発」の可能性>

問題の共有における停滞を打開したのは、外部との出会いにあった。森田(2015、2018)によると、問題を発見したものの教室実践を変えきれない教師が、他の学校の授業研究会や外部の研究会に参加したことにより「触発」され新しい挑戦を展開していた。

しかし、これまでの研究においては、校内を対象とした教師の学びの研究は蓄積されてきたが、「学校の外側がどのように『触発』を生み、どのように教室実践の変革へとつながるのか」についての研究は十分に検討されていない。本研究課題の核心をなす問いはこの点にある。

2. 研究の目的

本研究の目的は、「学校の外側がどのように『触発』を生み、教室実践の変革へとつながるのか」を検討することを通して、学校外における教師の学びの様相の一端を明らかにすることにある。

具体的には、第一に、学校の外側による教師の成長とその持続の様相について、「触発」の経験と、その後の個々の実践へとつながっていく過程に焦点を当てて分析することにある。A.Hargreaves et al.(2018)は、これまでの教師教育改革の多くが、教師の共同活動を目的化し、協働による教師個々の成長とその持続を十分に明らかにしてこなかったことを指摘している。授業研究会の談話分析研究は、こうした課題に対して校内における教師の成長と持続の様相を明らかにすることで応えるにとどまり、校外については十分に検討していない。

また、教育方法研究や幼児教育研究において、レッジョ = エミリアの哲学と方法が、その方法の型だけでなく、多くの人を触発し、新たな方法を生み出している点において注目されている。こうした、ある実践に触発され、新たに自身の実践を変革するプロセスは、単純な方法の適用である「複製アプローチ copied approach」に対して、「触発アプローチ inspired approach」と呼ばれている(秋田 2018)。これまでの研究において、実践の質の更新の持続のためには「触発アプローチ」が重要であることについては共有されてきたものの、「触発アプローチ」がどのように実現されているのかについての検討はなされていない。本研究が外部との「触発」の局面を対象にする意味はここにある。

第二、学校外における教師の学びが「複製」ととどまらず「触発」による教室実践の再構成へと展開するための課題とその克服の鍵を明らかにすることにある。近年、教職大学院が教育委員会、自治体行政、大学のハブとなって教師教育を生涯学習としてデザインする必要性が提起されている。教師の学びは、教員養成課程、教育センターにおける経験年数による研修、教員免許状更新講習といった直線的なものとしてではなく、教職大学院や校内授業研究会、また、学校改革ネットワークへの参加など、複数のネットワークに位置づきながら展開することが想定されている。本研究は、外部における「触発」による経験の再構成を可能にする教師の学びの総括的システムデザインの基礎研究となる点において創造性を発揮する。

3. 研究の方法

<対象事例>

本研究では、他校の授業研究会への参加における「触発」の経験と、その後の教室実践への展開を検討するため、2018年度末に学校改革を開始した山形県酒田飽海地区の5校において、他校の授業研究会を訪問した教師の経験を対象として分析する。山形県酒田飽海地区における、酒田市立浜田小学校、酒田市立第四中学校、酒田市立一條小学校、酒田市立八幡小学校、遊佐町立遊佐中学校の5校が2018年度末から学校改革を開始した。いずれの学校も、学校改革を学校ごとに取り組むと同時に、校内授業研究会だけでなく、2012年から学校改革を始めていた山形県最上地区の学校への訪問を実施している。

<分析資料と方法>

本研究では、以下の通り、分析単位を設定する。分析の1サイクル目は、他校の授業研究会における記録、共同構築的インタビューの記録（その後の紙媒体の資料も含む）、授業観察記録、そして共同構築的インタビューの4つで構成し、分析資料として収集する。その後、1人の教師が2回校外に出ることは少ないため、2サイクル目からは、校内授業研究会における記録、共同構築的インタビューの記録（その後の紙媒体の資料も含む）、授業観察記録、そして共同構築的インタビューの4つで構成し、分析資料として収集する。1年間に教師1人あたり3サイクル分の検討を行う。

本分析を通して以下の二点について明らかにする。第一に、何に触発され、どのような授業を構想し、実際にどのように授業を実践したのか。第二に、触発と実践化を可能に（もしくは難しく）したものは何か。

【引用参考文献】

- 秋田喜代美(2018)「越境の経験」『子どもたちからの贈りもの：レジヨ・エミリアの哲学に基づく保育実践』、萌文書林、pp.10-23.
- A.Hargreaves et al.(2018) Collaborative Professionalism. London: Corwin Press.
- 石井英真(2013)「教師の専門職像をどう構想するか 技術的熟達者と省察的実践家の二項対立図式を超えて」『教育方法の探究』第16号、pp.9-16.
- 北田佳子(2008)「校内授業研究会における新任教師の学習過程：「認知的徒弟制」の概念を手がかりに」『教育方法学研究』第33号、pp.37-48.
- Saito Eisuke et al. (2012) 'Why is school reform sustained even after a project? A case study of Bac Giang Province', Vietnam Educational Change(13), pp.259-287.
- 坂本篤史(2011)「授業研究を通じた小学校教師の授業を見る視点の変化：授業研究に携わった経験に対するM-TGAを用いた教師の語りの分析」『教師学研究』第10号、pp.25-36.
- 森田智幸(2015)「改革に挑戦する教師の語りの分析 持続する学校改革の内側に焦点をあてて」『山形大学大学院教育実践研究科年報』、第5号、p.14-24.
- 森田智幸(2018)「専門家としての教師の学びの現状とその評価」『山形大学大学院教育実践研究科年報』、第9号、pp.24-33.

4. 研究成果

本研究の成果は、以下の3点にある。

第1に、オンラインによる研究会を組織し、教師同士学び合う場を構築したことにある。新型コロナ禍は、申請時に想定されていなかった事態だった。その中でも、学校外の教師とのつながりが、自身の教室実践の再構築をエンパワーすることが見えてきた。

第2に、新型コロナ禍にあっても対面での授業研究会を開催する意義の一つに、教師の自律性、校長の自律性のエンパワーがあることを見出したことである。新型コロナ禍に置かれることで見えてきたことは、教育実践が根源的に抱える複雑性に対峙する際の活動の構成のされ方である。語りを通して見えてきたことは、校長と教師は、教育活動の制限を記載した通知、マスメディアを中心とした情報の中で、限られた選択肢の中から行動することを強いられようとしていた。対面での授業研究会の場に、外部の助言者、行政担当者（指導主事）、他校からの参加者があったことが、可能性を探り合い、自ら挑戦し、実践する機会を創り出した。

第3に、校外の授業研究会への参加をきっかけとした、新人期の省察経験を描き出すことができたことにある。多くの研究が明らかにしてきたように、新人は「白紙」状態におかれているのではない。日記の叙述の分析から見えてくるのは、新人が多くの「規範」にしばられ、実践の自由度を狭めていく様相である。子どもの事実を見て自身の実践をつくるという省察様式から疎外されている。この研究により、新人教師への支援については、共に子どもの事実を見ることから始めることの有効性が示唆された。

〔引用参考文献〕

- Tomoyuki Morita (2021) Sustaining school reform and learning innovation under COVID-19 situation - A case study on Yamagata SLC Network -. , The 8th International Conference for the School as Learning Community (招待講演)(国際学会).
- 森田智幸(2021)校長と教師の語りから探る授業研究会の意義、日本教師教育学会第31回研

究大会.

Tomoyuki Morita (2022) Trajectory of Building up SLC in a High School in Yamagata : Changing “Group Activities” to Inquiry and Collaboration., The 9th International Conference of School as Learning Community (招待講演)(国際学会)

森田智幸(2023)「探究と協同の学び」における「小さなやりとり」の機能 - 「学びのフォーラム小学校版」の事例検討、山形大学大学院教育実践研究科年報、第13号、26-45頁。(査読有)

Tomoyuki Morita (2023) Inquiry in a Jumping Task Focusing on “Help Seeking” in “Exploratory Conversation”, The 10th International Conference of School as Learning Community (招待講演)(国際学会)

森田智幸,佐藤瑞紀(2023)教職大学院を修了した新人教師の「省察」経験:「子どもの事実認識」に着目して、日本教師教育学会年報、第32巻、173-185頁、査読有

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 森田智幸	4. 巻 13
2. 論文標題 「探究と協同の学び」における「小さなやりとり」の機能 - 「学びのフォーラム小学校版」の事例検討	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 山形大学大学院教育実践研究科年報	6. 最初と最後の頁 36-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 森田智幸, 佐藤瑞紀	4. 巻 32
2. 論文標題 教職大学院を修了した新人教師の「省察」経験：「子どもの事実認識」に着目して	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本教師教育学会年報	6. 最初と最後の頁 173-185
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 3件/うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Tomoyuki Morita
2. 発表標題 Inquiry in a Jumping Task Focusing on “Help Seeking” in “Exploratory Conversation”
3. 学会等名 The 10th International Conference of School as Learning Community（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 森田智幸
2. 発表標題 趣旨説明：授業研究会における「学びの事実の省察」の検討
3. 学会等名 日本教育方法学会 第58回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 森田智幸
2. 発表標題 若手教師の一年間 軌範的跳躍に焦点をあてて
3. 学会等名 日本教育方法学会 第58回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Tomoyuki Morita
2. 発表標題 Trajectory of Building up SLC in a High School in Yamagata : Changing “Group Activities” to Inquiry and Collaboration
3. 学会等名 The 9th International Conference of School as Learning Community (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 森田智幸
2. 発表標題 校長と教師の語りから探る授業研究会の意義
3. 学会等名 日本教師教育学会第31回研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Tomoyuki Morita
2. 発表標題 Sustaining school reform and learning innovation under COVID-19 situation - A case study on Yamagata SLC Network -
3. 学会等名 The eighth International Conference for the School as Learning Community (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------